

# 人生史の意義と目的

人が残す財産のうちで最も価値あるものは「人生経験」である。どう育ち、どんな苦労をして成功したか失敗したか、何を学びどう考えたか、これを知ることがは後世の貴重な知恵となる。偉人英雄でなくても誰にでも語っておきたい一冊の人生史がある。それを子孫に存分に残せた人は幸せだ。

## 凄じいドレマを見せでもらった

一通の手紙の全文である。  
「ドラマは高木書房の齋藤社長から『アイウイルの酒井さんから出版の問い合わせがあった』という一報から始まりました。

平成二十九年八月月中旬『高木書房さんをお願いする』との第二報。山田末廣様の一代記・自省録の制作を受けることが決まりました。齋藤はさっそく名古屋に行き山田様にお会いし、完成日時も十月末と指定されたとのこと。

原稿を整理するのにどの程度手が届かなかったか、今は概略しか覚えていないが「どんなことがあっても山田様にお届けする約束を守れ！」と激励しました。

十月二十八日齋藤からのメールの報告。「本が完成し、染谷先生、島山専務、酒井さんが山田様が入院している病院へ行ったが、胸のほとんど意識がなかったが、胸のうらむしかり手を組んで「ありがとう」と言ったという。そしてその翌日山田様は亡くなられました」。

私はすぐ齋藤に電話。「おい、信二！ よかったな、出版社高木書房の最高の物語だぞ、ありがとう、ありがとう」と半分泣きながら感動の心を伝えました。

昨日出張から戻った私の机の上に立派な帙入り、布張り表紙金箔

会長は十時丁度に現れた。一年前に会った時は血色よく精気みなぎっていたが、どこかやつれていて元気がなかった。自宅から直接やってきたようでワイシャツのすそがズボンから少しはみ出ている。「昼食には少し早いのでどこかでお茶でものみましょう」と歩き出した。歩みは遅かった。八十二歳という歳のせいだけではない。病気ではないかと思つた。

分と息子の社長との関係そして苦労してきた若い頃の話と会長は一方的に話をした。喫茶店で話し、カニ料理の食事をしながら話した。話がつきた帰り際に、会長は「私の人生史を書いてくれませんか、染谷先生」と言つた。これが今回の目的だったのだ。

経営者養成研修で研修生に課題として「人生史」を書かせている。私もかつて自分の人生史を書いた。しかし他人の人生史を書いたことはない。それを仕事にしている。取材したものを原稿にして渡すと俄然、会長の色が変わつた。次回行くと原稿はまっかにか加筆修正されていく。

六月九日に銀座のホテルで高木書房五〇周年記念パーティが開かれた。高木書房の齋藤社長は、三〇年前近藤氏の部下だった。「東京で出版社をやってくれ」「はい、誠実な精神態度がその表情に刻ま

経営管理講座 353 染谷和巳

れている。私は「ここにやってもらおう」と酒井に言つた。これが近藤氏の手紙の冒頭につながる。島山、酒井の取材に合わせ齋藤社長も会長宅に挨拶に行つた。会長は顔色が悪く入院を勧められているという。

取材と原稿チェックが済み後は齋藤社長の編集制作に委ねられた。九月中旬会長のガンは進行し入院。「一日に日に悪くなつて体が小さくなつていませう。口をきくのも大儀そう」と奥様。

編集校正の原稿のやり取りはむだなく正確でも感性的豊か。島山と酒井は齋藤の「仕事」に舌を巻いた。「齋藤社長は無理を聞いてくれます。これなら十月末に完成します」と酒井。

本は一週間早く完成。十月二十五日に見本を届けることにした。実は前日の二十四日夕方に届けて手渡した。

「社員はみなすぐ読んだようで、読みやすかった、面白かった、一気に読んだ、会社の歴史が解って勉強になった、会長の努力に感動したと感想を述べていました」と社長。「会社のためにいいものを残してくれました」と改めて喜んでくれた。

十一月三十日の名古屋のホテルでの「徳ぶ会」には四百名が参列。会長の「自省録 土との闘い」の文章や写真がそのままビデオや展示物に使われていた。

ることができた。私は「会長は二十五日と聞いて待っている。約束どおり明日行きます」と言つた。二十五日午後一時、病院に行く。奥様と社長が「きのうから何を言つても返事もしません。寝ているのか意識がないのか。もう解らないと思ひますよ」と言う。

「会長！ 本、できましたよ！」会長は薄く目を開け、それからカッと目を見開いて本と私を見た。ウンウンとうなずき、胸の前を指し「ありがとう」と言つた。奥様は驚いて「あら、喋つた」とつぶやいた。

会長は手でふとんをずらして起き上がるようにした。力がなくてそれはできなかった。私は小さくなつてしまつた会長におおいかぶさり「よかったですね」と言いながら頬ずりした。酒井が目には涙を浮かべていた。

## 社員や子孫に読ませる教科書

や祖先を敬う心を育む。よつて自力で自筆で書くのがいい。

もうひとつ、子孫や後世のために自分の言動足跡を書き残すのが目的の人生史がある。経営者が後継者や社員に、教科書として提供する。この場合、人が読むに堪える文章が決め手である。自分で書いてもいいがプロに手を入れてもらい、作品に仕上げる。山田会長のように話したことを文にしてもらつて後に確認するやり方もこれに入る。

アイウイルと高木書房は依頼があれば受けるが、できた人生史を見て依頼者が喜ぶ顔を見たいがためであり、これを商品として第四の柱にするかどうか逡巡している。

「囲炉裏のはたに縄なう父は過ぎいさの手柄を語る 居並ぶ子どもは眠さを忘れて 耳を傾けこぶしを握る」(小学唱歌「冬の夜」二番)

## 本を見て「ありがとう」と言つた

取材したものを原稿にして渡すと俄然、会長の色が変わつた。次回行くと原稿はまっかにか加筆修正されていく。